

宝くじ無情

小道 周帆

浜西は何時ものように都営団地の二階から階段の手すりを頼りにしながらも、最後の一段は元氣よくジャンプして一階の出口に着いた。

「六時三十分には少しあるな」

と安心しながら公園に向かっていった。顔馴染みの仲間に会釈しながら進んでいくと声が掛かった。

「浜西さん、おはよう！」

「おはようございます。よろしくお願いします！」

ラジオ体操のリーダー中島さんからだ。毎朝欠かさず携帯ラジオ持参で、体操を指導されている。中島さんの周りは女性でいっぱい。平均年齢は七十歳くらいだが、誰にも優しく人気者。夏休み期間中は小学生の元氣な声も聞こえるが、今はお年寄りばかりで、ラジオ体操第一と第二を四十人くらいでしている。浜西も気持ちよく身体を動かし、健康な朝を実感している。

体操が終わるとそのまま公園の前の道を歩いて隅田川に出る。川べり散歩道は「隅田川テラス」としてきれいに整備された。そして、『あらかわ遊園』の裏手を通り過ぎれば、鮮やかな黄緑色のアーチ型橋梁の小台橋が現れる。そこまで歩いて右折すると、やがて都電荒川線沿いの道に出て都営西尾久団地の浜西家に戻る。そんな朝の日課が十年以上続いている。時には「隅田川テラス」のベンチに腰を掛け、川面を見たり、向かい側のマンション群、さらには小台橋から東京スカイツリーを眺めたりしながら、浜西の七十八年の人生を振り返ったりもしている。なんととはなく、いろいろなことが浮かんでくる。

浜西の頭に一番よく登場するのが、十年前に亡くなった妻三沙のことだ。浜西にはもったいないほどよく出来た女房だったと今更ながら思う。そうだ、四十数年前だったな。この団地に抽選で当たった時の三沙の喜びようが昨日のように思い出される。みすぼらしい木造平屋の借家生活から逃れ、新しい四階建ての団地の住人になれるんだと、まるで子供のようにはしゃいでいた。

都営住宅には所得制限があるが、浜西家は楽々クリアできる程しか収入がなかった。十年ごとに見直しがあり、ご近所さんは所得オーバーで都営住宅を明け渡し、民間のマンション等に引っ越していったが、そん

な心配もなくずうつと都営西尾久住宅に住み続けられた。

その団地が高層化され、十階建てになった翌年に突然倒れて、そのまま逝ってしまった。苦勞掛けたのが遠因ではないかと浜西は自分を責めていた。

三沙は娘、息子を立派に育て、子どもの手が離れると、近くのスーパーに働きに出てくれた。全て子どもの教育費のためだった。だからこその娘も息子も大学まで進学できたのだ。浜西の給料では、とてもじゃないが食うにいったいだった。スーパーでの働き振りが評価され、パートから正社員にまで登用されていた。

スーパーを定年まで勤めあげ、退職後も乞われて囑託の仕事をし、その期間が終わった三カ月後、三沙は六十三歳の時に突然亡くなってしまった。今思えば仕事人間だっただけに、張り合いがなくなり、気が抜けたのだろうか。それにしても、もう少し楽しい老後を過ごさせてやりたかった。川面を眺めていると、自然と涙ぐんでしまう。

所得が少ないといっても、浜西勇一はダメ人間ではなかった。いや真面目にドが付くくらい真面目に働いた。そんな現役時代のこともベンチに座っていると思ひ出す。

毎朝、浜西は都営荒川線に乗って、終点の三ノ輪橋まで行き、南千住の零細工場に何十年も通っていた。歳は七つしか違わないが、貫禄があり、親父さんという感じの大岡さんと二人だけの小さな金属加工の工場だった。中古の旧式の工作機械が一台あるだけだったが、親父さんは仕事の合間に浜西に手取り足取り教え込んだ。一人前の旋盤工になるには十年程掛かるといわれていたが、浜西自身も旋盤の面白さにのめり込んだこともあって、仕事を始めて七年目には一人前だと親父さんに褒めてもらった。この指導の恩はいまだに忘れられない。口数の少ない浜西には機械と向かい合っているときに最高に幸せだった。

旋盤は材料の金属に刃物を当てて、材料を削り、設計図に示された形状を作り出す仕事だ。しかも浜西の修業した時代は、今のようにコンピュータで操られるNC旋盤はなく、旋盤工が手作業で材料を加工しなければならなかった。それだけに親父さんはまず刃物（バイト）をグラインダーで研ぐことを浜西に身に着けるよう指導してくれた。

当時、最新のNC旋盤が生まれたと聞いても、非常に高価なもので、孫請けの町工場ではとても手が出せるものではなかった。本当に細々と細かな仕事を丁寧にしてはいたが、コスト削減の要請が零細工場には厳しく求められ、儲かる状況もなく、浜西も安い給料でもやむを得ないと

思っていた。その分コンピュータに負けるまいと手の感触は人一倍鋭く、それが生き甲斐になった。こうして浜西の職人気質は培われていった。親父さんと二人三脚で仕事をしてきたが、親父さんが七十歳になった時に、これを機会に廃業することになった。今から十五年前、浜西六十歳の時であった。最後までいい親父さんで、あろうはずもないのに工場の売却資産等から浜西には思いもしない退職金を出してくれた。金額の多寡ではなく、親父さんの気持ちがうれしかった。本当に町工場で良かったと心から思った。

三沙が育て上げた子ども、娘沙恵子は短大を卒業し、地元の信用組合にお世話になり、職場結婚をして、北千住に住んでいる。

息子忠雄は浜西に影響を受けたようで、工業高校の機械科で学んでいたのが、卒業後は息子と二人で『浜西機械』を立ち上げようとの夢もあったが、三沙は猛反対で、

「零細企業では、いくら頑張っても芽が出ない。これからは学歴時代。より高い技術を得るには大学の工学部を目指せ」

と発破をかけていた。一浪はしたものの、金のかからない千葉大工学部に入ってくれた。卒業後は金属系の巨大企業に入社し、技術者として活躍している様子だ。

二人とも、独り住まいの浜西の生活を心配してくれているようで、ボーナスが出る度に年二回、五万円ずつ小遣いをくれている。

僅かばかりの国民年金を基本に、足りない分は退職金と三沙が残してくれた預金を少しずつ取り崩して生活をしている。それだけに子供たちから贈られる小遣いはありがたい。

小台橋を通り過ぎた西尾久三丁目には、お寺が多い。江戸時代は渡しのあるところ、人の往来が多かったのだろう。その所為か地藏寺、華蔵院、大林院、宝蔵院、碩運寺そして本華寺がある。その寺々に月一回お参りしている。その願いは三沙への感謝の気持ちと、娘沙恵子、息子忠雄の一家の健康と幸せを祈っている。それに加えて一つだけお願いしていることがある。

それは定年後に始めた浜西の唯一の趣味となっている「宝くじ」購入である。その当選願いだった。初めて「宝くじ」を買ったのは、珍しく三沙と上野に買い物に行った時だった。

「あなたと一緒に買い物なんて、珍しいことがあるのだから、宝くじを買おうと当たるかもしれないわよ」

「じゃあ買ってみるかな」

そんな軽い気持ちで買った東京都宝くじが、二週間後に四等、下四ケタ3675で、五万円が当たったのだ。それ以来、三沙と買物に出るたびに「宝くじ」を買ったが、なかなか当選することはなかった。

親父さんに話すと

「それはビギナーズ・ラックといわれるものだ。もうそれで運はおしまいだぞ」

と笑いながら言われた。

息子は工学部で確率論を学んだようで、論理的に説明する。

「お父さん、宝くじの一等はまず当たらないよ。当たる確率は二千万分の一、これは限りなくゼロに近い確率だよ。例えば江の島海岸の砂浜の砂の中に特定の一粒を見つucker様なもんだ。バカバカしいからいい加減にすれば」

娘はさすがに優しい。

「そうは言っても抽選までは夢を見させて貰っていると考えれば、パチンコも競輪もやらない父さんの唯一の娯楽なんだから、いいんじゃないの」

「そうだな、宝くじの売上金の四十%は自治体の財源になるのだから、地方税を支払っていると考えればいい訳だ。まあ、我が家は都営住宅に安い家賃で済んでいるのだから、お父さんの宝くじ購入で、少しくらいは東京都に還元していると思えばいいんだよ」

子どもたちにバカにされながらも、浜西はいつか一千万円程度は当たる予感がしている。これだけ真面目に勤め上げた浜西へのプレゼントと、神の手違いで死に追いやった三沙へ、神様からお詫びのしるしとして当選させてくれても可笑しくはないだろう。

そうは言っても、宝くじ売り場に並んでいる人たちは真面目そうな人ばかりだ。しかも年金生活でアップアップしている老人たちではないか。みんな浜西と同じように、いつかは神様をご褒美くれると信じている人ばかりだ。誰かが宝くじ売り場の行列は「貧乏行列」といつていたが、いかにもその通りだと思う。

日本にカジノを認めて、観光開発に役立てようとする議論で、「やめられない・止まらない」ギャンブル狂対策が課題になっていた。パチンコ、競輪、競馬、競艇等のギャンブルが中心だったが、宝くじも習慣性のあるギャンブルに違いない。

「宝くじ狂」を生み出すかのように、その販売頻度は驚くほど多い。「ジ

ヤンボ」は「年末ジャンボ」(十二月)、「東京五輪協賛ジャンボ」(三月)、「ドリームジャンボ」(六月)、「サマージャンボ」(八月)、なぜか「ハローインジャンボ」(十月)と、年五回もある。しかもミニジャンボも併売しているのだから、併せて十回にもなる。さらに「関東・中部・東北自治宝くじ」が年に十九回、その上「東京都宝くじ」も年に十九回。合計すると年間四十八回にもなる。実に毎月四回、言い換えれば毎週販売されていることになる。正にギャンブル花盛りの日本に、さらにカジノまでやろうとしているのだから呆れてしまう。真面目な勤労意欲をそぐことにならないのか!

今回の年末ジャンボは一等賞金七億円。前後賞を含めると十億円と想像もできない賞金額になる。働き終えた浜西は、年末ジャンボを購入したが、十億円を狙っている訳ではなかった。少しでも確率の高い二等一千万円を当てたいと思っている。したがって宝くじ番号は連番ではなく、バラを購入している。

一千万円が当たったら、どう使おうと考えているのだろうか。当選した宝くじは親子三人の共同購入にする。これは二人の子どもから小遣いをもらって、それを財源にして買っているのだから当然だ。賞金は三人で山分けとなり、一人三百三拾万円、それぞれの家庭への臨時ボーナスとなるだろう。貯めるなり使うなり自由にすればいい。

浜西の三百三拾万円は三沙の墓地購入をして、浜西家の墓を建てたい。もうそれで賞金は使い果たすつもりだ。ささやかな夢を実現させて欲しい。抽選の日まで毎日西尾久の寺々をお願いに回っている。

少しだけは効果があったのか、おこぼれの六等三千円、下二ケタ30が当たった。一千万円には程遠いが、これを元手に次が狙える。

あと千円を足して「東京都初夢宝くじ」を二十枚購入した。一等は一億五千万円だ。そしていつものように西尾久の寺々を順次祈願に回った。ここ二、三日は大寒波が日本列島に押し寄せており、北陸は大雪、そして東京も今シーズン最も寒い日となった。お参りする浜西の身体も冷え、少々熱っぽい感じがし、すぐに寢床に入った。翌日も少しフラフラするので、お参りは止めて家にこもり、冷蔵庫の残り物を食べた。夜になると、胸が締め付けられるような感じがし、明日は医者に行こうと考えてそのまま寝てしまった。

二日続けてラジオ体操に参加していない浜西を心配して、世話役の中島が訪れたが、応答がない。

「こりゃ、病が重くて寝込んでいるに違いない。そうだ、一人暮らしの老人をサポートしている人に連絡をして、鍵を開けてもらおう」

中島をはじめ二、三人の人が部屋に入った。浜西は僅かに息遣いがあり、救急車を呼んで、救急病院に搬送した。コロナと診断され、隔離病棟で手厚い看護を受けたが、もはや手遅れで、夜半に息を引き取った。死因はコロナによる肺機能障害であった。

葬儀は厳重な衛生管理のもとで、実子の沙恵子と忠雄のみで執り行われた。沙恵子と忠雄は合掌をしながら、こんな言葉を手向けた。

「父さんの趣味となっていた宝くじ二十枚を棺に収めておくよ」

「お父さん、天国で、宝くじの当選祝いを母さんとやってよ」

一週間後、「東京都初夢宝くじ」の抽選が行われた。一等一億五千万円は33組148267番であった。

その当選した宝くじは浜西の棺に収められ、浜西の身体とともに燃え尽きた二十枚のうち一枚だった。

完

(5074字)